

テレビアニメの流布する「女ことば／男ことば」規範

佐竹 久仁子

1 はじめに

ことし2003年、国連女性差別撤廃委員会は日本政府の取り組みに対してコメントを発表した。そこでは、依然として実質的な平等が進んでいないことに対する懸念が表明され、女性差別撤廃へむけてのいくつかの具体的勧告がなされている¹。委員会の勧告のひとつは、日本社会に存在する固定的な性別役割分業意識の変革についてであった。現代の日本社会では「両性の平等」は社会常識となっているといえるだろうが、それにもかかわらず性別役割分業意識がこうして国際社会の非難をあびるほど根強いのは、その「平等」の内実が「女と男は、優劣はなく平等だが、本質的に異なる存在だ（「女らしさ」「男らしさ」がある）」という異質平等論によるものだからである²。

「女らしさ」「男らしさ」という自然の性差が存在するという信念、すなわち、「本質的に女とは／男とはかくあるものだ」という信念は、女と男に別々の行為規範（ジェンダー規範）にのっとったふるまいを要請する。日本におけるこの信念の強固さは、「女ことば」「男ことば」という言語使用におけるジェンダー規範の存在によっても裏づけられる。人があらゆる場面で言語行為をおこなう必要があることを考えれば、この規範—「女ことば／男ことば」規範はジェンダー規範のなかでももっとも重要な位置を占めるものであるといえる。この規範が日本語社会において明確に意識されていることは、「女ことば」「男ことば」という語がごく日常的につかわれることからわかる³。

現実の言語使用は多様であり、実はこの規範にしたがった言語行為が常におこなわれているわけではないのだが、それにもかかわらず規範意識は維持されている。だからこそ、ある発話が「女らしい」とか「男らしくない」と評価されることがおこるのであり、また、ときにはそれがその言語行為の効力に影響を及ぼすこともあるのである。たとえば、店員に「早くしてくれ」と

催促したのが男であれば、単に催促として聞かれるだろうが、それが女のばあい、女らしくない発話として聞かれ、店員に反発(女のくせに)や軽蔑(無教養な女だ)の感情をもたれてじゅうぶんなサービスを受けられないかもしれない。したがって、この規範に関する知識は、日常生活をおくっていくうえで、必要でもあり有効でもあるということになる。そして、この規範を多かれ少なかれ参照した発話行為がなされるということが、またことばづかいの性差を事実として観察可能なものにし、さらにそれが「女と男のことばづかいはちがって当然だ」という信念を補強するのである。

わたしたちは幼いときから周囲のおとなたちやメディアをとおして、女と男の言語使用のありかたやそれについての評価にふれ、「女ことば／男ことば」規範に関する知識を身につけていく。本稿では、現代のこどもが得るこの知識の内容がどのようなものであるかを、テレビアニメのデータにもとづいて検証する。テレビは、しぐさや表情とともにことばを伝え、擬似的に対面コミュニケーションを経験させるもので、身近であるだけにそこでのことばづかいが与える影響は大きい。現在、アニメや「実写もの」などのこども向け番組は週に30種以上放映されており、これらがこどもの「女ことば／男ことば」規範意識の形成に重要な役割を果たしていることはまちがいないと思われる。

2 データについて

2.1 調査概要

幼児や小学校低学年児童を視聴者層に含むと思われる以下の6種のテレビアニメを対象に、登場人物のことばづかいの性差について調査をおこなった。

〈 〉は各アニメの本稿での略称である(収録時間は22～26分、作品の詳細は末尾リストに掲載)。

「それいけ!アンパンマン」〈ア〉 「クレヨンしんちゃん」〈ク〉

「サザエさん」〈サ〉 「ちびまる子ちゃん」〈ち〉 「ドラえもん」〈ド〉

「おジャ魔女どれみ」〈魔〉

注目したのは、一般に性差が目立つとされる文末表現形式および自称詞である。まず、会話部分を文字化したものを文単位に切ったデータを作成したが、その際、1文をつぎのような基準によって認定した。

- ①用言の言いきり、あるいは終助詞を文末の指標とする。
- ②①以外では、ポーズがおかれた部分、順調に発話権の移った部分は文末とする。なお、発話の途中で割りこみがあって言いさしになった文は除外する。
- ③書かれたものの音読、歌、多数による同時発話で話し手の特定できないもの、笑い声・叫び声・うめき声などのパラ言語的要素は除外する。

この結果、得られた文の総数は3299文であった。各アニメの文の数とせりふのあったキャラクターの数を以下の〔表1〕に示す。

〔表1〕文数とキャラクター数

*「大」はおとな、「小」はこども

アニメ	文数	女の人数	男の人数	人数計
〈ド〉	567(女 112・男 455)	6(大 4・小 2)	11(大 4・小 7)	17(大 8・小 9)
〈ア〉	733(女 297・男 436)	14(大 3・小 11)	13(大 4・小 9)	27(大 7・小 20)
〈魔〉	593(女 397・男 196)	12(大 4・小 8)	6(大 1・小 5)	18(大 5・小 13)
〈ち〉	493(女 377・男 116)	10(大 4・小 6)	9(大 3・小 6)	19(大 7・小 12)
〈サ〉	469(女 179・男 290)	3(大 2・小 1)	9(大 5・小 4)	12(大 7・小 5)
〈ク〉	444(女 204・男 240)	12(大 10・小 2)	11(大 4・小 7)	23(大 14・小 9)
総計	3299(女 1566・男 1733)	57(大 27・小 30)	59(大 21・小 38)	116(大 48・小 68)

2.2 調査結果から

ここでは、調査結果から性差が目立った形式を簡単に紹介する。(1)～(5)は文末表現形式、(6)は自称詞についてである。

(1) 助動詞ダの有無：断定・説明、命令の表現と疑問詞疑問文

助動詞ダの使用可能な、断定の判断・説明・命令の表現意図をもつ文と疑問詞疑問文について、助動詞ダの有無をみたのが〔表2〕である。

〔表2〕 *数字は文の数、終助詞を下接するものも含む。以下同じ

	断定・説明		命令		疑問詞疑問文	
	ダ有	ダ無	ダ有	ダ無	ダ有	ダ無
女	76	213	0	5	0	58
男	225	87	19	0	46	30

助動詞ダの使用は、男にかたよって観察される。断定・説明の表現で、女のダ使用は76例あったが、そのうち51例が「だよ・だわ・だね」のように終助詞をとまなっており、単独使用のばあいには「発見」の文（「あ、あの子だ」〈ち〉）や「納得」のひとりごと（「やっぱりまちがってたんだ」〈魔〉）、「やだ」「そうだ」のような感動詞的に用いられる慣用的表現である。男のばあい、225例中ほぼ半数の119例が単独の使用である。なお、その他、断定・説明の表現として女にはザマス（6例）、男にはジャ（10例）があらわれた。

〔例〕

- ・断定：ドラミが味方をすればおんなじことだ。〈ド〉 やさしい味だね。〈ア〉
完全に遅刻だわ。〈魔〉／これは肉まんのお皿φ。〈ち〉 このふたり、
ラブラブφよ。〈魔〉 見かけない子φね。〈ア〉
- ・説明：ぼくだってもう五年生なんだよ。〈サ〉／あたしがもらったのφよ。
〈ち〉 いま作ってるところなのφ。〈ア〉
- ・命令：やめるんだ。〈ア〉／あなたたちこそ規則をちゃんと守るのφよ。〈ド〉
- ・疑問詞疑問文：これでどうだ。〈ア〉 なんて試合に来なかつたんだよ。〈魔〉
／どこがこどもらしいのφ。〈ク〉 具合はどうφ。〈ク〉

(2) 助動詞ダロ(ウ)とデショ(ウ)：推量、確認の表現

〔表3〕

	ダロウ・ダロ	デショウ・デショ
女	4	25
男	32	13

〔表3〕は、助動詞ダロ(ウ)・デショ(ウ)の出現状況を示したものである。「女-デショ(ウ)／男-ダロ(ウ)」の使用傾向がみられる。女のダロ(ウ)使用は、ひとりごと（「何してるんだろう」〈魔〉）や終助詞ネをとまなうもの（「お

なかすいてるんだろうね」〈ち〉)にかざられる。

[例]

- ・推量：やっぱりのび太のやつ、恐くなって逃げたんだろう。〈ド〉おじいちゃんが帰ってきたらがっかりするだろうな。〈ア〉／なんてお気の毒なんでしょう。〈魔〉 どうせそうでしょうよ。〈ク〉
- ・確認：あしたの土曜日は休みだろ？ 〈魔〉／お兄ちゃん、あたしの日記、読んだでしょ？ 〈サ〉

(3) 普通体での終助詞カ使用

〔表 4〕

	カ有	カ無
女	32(カ16、カイ 5、カナ 9、カネ2)	144
男	133(カ93、カイ14、カナ20、カネ1、カヨ5)	91

普通体の疑問文における終助詞カの使用の有無をみたのが〔表 4〕である。

「カ無」は、終助詞カの付加が可能な疑問文である。終助詞カの使用は男にかたよっていることがわかる。また、女のカ使用は、カイ・カネ(すべて〈サ〉の登場人物フネのせりふ)をのぞき、相手への質問ではなく、納得や疑いの文(「どうでもいいか」〈ク〉、「相手は中一だし、何を話せばいいかなあ」〈魔〉)である。疑問文ではこのほかに、カシラの使用は女(27例)、ダイの使用は男(6例)にかざられている。

[例]

けが、なかったか？ 〈魔〉 大丈夫か？ 〈ド〉 こんなところ、通るのか？ 〈ド〉／ねえ、まるちゃん、うちの人に言ったの？ 〈ち〉 大丈夫？ 〈ア〉 全部りょうた君が作ったのの？ 〈魔〉

(4) 命令形とテ形の使用：行為要求の表現

〔表 5〕は行為要求の表現について、動詞命令形とテ形の使用をみたものである。一般動詞の命令形使用は男にかたより、女のばあいは敬語動詞の命令形かテ形が用いられる。女の一般動詞命令形は 5 例あるが、2 例はかけ声「がんばれ」、1 例は「好きになあれ」という形式的用法で、実質的命令の表

現は2例だけである。

〔表5〕＊「敬語命令形」には「ちょうだい」「ごらん」を含む。

	一般動詞命令形	敬語命令形*	テ形
女	5	40	64
男	56	17	36

〔例〕

ハチミツを返せ。〈ア〉 気をつけろよ、どれみちゃん。〈魔〉／のび太、はつきりおっしやい。〈ド〉 やめなさい、そんな遊び。〈ク〉 おいしいワッフルを作ってちょうだい。〈ア〉／返して。〈ア〉 まあ、入ってよ。〈ク〉 気をつけてね。〈ア〉

(5) 終助詞ゾ・ワ・ネ・ナ・ヨ

①ゾは男のみ(51例)、ワは女のみ(101例)に用いられている。

②ネ・ネエの使用は、女147例、男64例で女に多い。女だけにみられるネの用法は、「あしたね」「残念ね」「そうね」のような「体言＋ネ」(42例)、ノネ(8例)、カシラネ(3例)である。また、女では、ネはもっぱら確認や同意といった用いられかたであるのに対し、男のばあいには「つきはなし」とでもいえる用法がみられる(5例。たとえば、「道具、出してよ、ジャイアンに勝てる道具」「ないね、そんな道具」〈ド〉)。

③ナ・ナアの使用は、女31例、男101例で男に多い。ナ・ナアには聞き手めあての確認・同意の用法(「負けたからには約束を果たしてもらうからな」〈ド〉)と聞き手めあて性のない用法(たとえば、ひとりごとの「あの子、かわいかったな」〈ア〉、「いいなあ」〈ち〉など)とがある。男では半数以上(58例)が聞き手めあての用法であるのに対し、女のばあいにはすべて聞き手めあてではない用法である。

④ヨは、女229例、男189例の使用があった。女だけにみられるヨの用法は、「体言＋ヨ」(54例)、ノヨ(38例)、男だけにみられるものは「一般動詞命令形＋ヨ」(18例)、「禁止ナ＋ヨ」(7例)、カヨ(5例)である。また、「用言述語＋ヨ」は女37例、男81例で男の使用が多い。

⑤その他の終助詞では、禁止ナ(14例)・サ(11例)・トモ(3例)・ゼ(2例)は男のみの使用である。

(6) 自称詞

自称の代名詞は、〈女：わたし・あたし〉、〈男：ぼく・おれ・おれさま・おら・わし〉とはっきりわかれる。今回のデータでは男の「わたし」使用はあらわれなかった。親族名称での自称(「お母さん」「兄ちゃん」など)は女にも男にも用いられるが、なまえでの自称は女の子にのみあらわれた。

3 キャラクターの役割設定とことばの性差

3.1 各アニメの特徴

2.2で示した項目はいずれも日本語概説書で「ことばの男女差」などとしてとりあげられるものであり⁴、テレビアニメにみられるせりふの性差はまさに概説書の解説どおりのものといっている。もちろん、テレビアニメに登場するキャラクターが性によって二分されたせりふを均質に割りあてられているといった単純な状況があるわけではない。また、アニメによってもことばの性差のあらわれかたは異なる。

ここで、アニメごとに性差の目立つ形式(性差形式)の使用状況をみてみよう。まず、文を2.2であげた項目のうちの文末表現形式をもとに、女に多い形式(f指標形式)を用いるものと男に多い形式(m指標形式)を用いるものに分類する。「f指標形式」「m指標形式」を用いる文としたのは以下のものである。f指標形式の使用が多くm指標形式の使用が少ないほど「女ことば」的、その逆は「男ことば」的なことばづかいということになる。

f指標形式：①ダを使用しない断定・説明、命令、疑問詞疑問の文⁵、ザマスをを用いる文 ②デショ(ウ)を用いた推量・確認の文 ③カを用いない普通体疑問文(カの付加可能なもの)、カシラを用いる疑問文 ④動詞テ形による行為要求表現 ⑤ワを用いる文

m指標形式：①ダ(ダワ・ダワネ・ダワヨを除く)・ジャを使用する文 ②ダロ(ウ)を用いた推量・確認の文 ③カ・ダイを用いる普通体疑問文 ⑤一

般動詞命令形を用いる文 ⑥ゾ、禁止ナ、聞き手めあてナ、ゼ、トモ、サ
を用いる文 ⑦「用言述語+ヨ」の文

〔表6〕アニメ別 f/m指標形式使用状況 *数字は、文数(%)

		〈ア〉	〈ク〉	〈サ〉	〈ち〉	〈ド〉	〈魔〉	全体
女	文数	297	204	179	377	112	397	1566
	f指標形式	165 (55.6)	122 (59.8)	98 (54.7)	110 (29.2)	72 (64.3)	124 (31.2)	691 (44.1)
	m指標形式	10 (3.4)	11 (5.4)	16 (8.9)	74 (19.6)	3 (2.7)	73 (18.4)	187 (11.9)
	その他	122 (41.1)	71 (34.8)	65 (36.3)	193 (51.2)	37 (33.0)	200 (50.4)	688 (43.9)
男	文数	436	240	290	116	455	196	1733
	f指標形式	59 (13.5)	21 (8.8)	12 (4.1)	11 (9.5)	44 (9.7)	17 (8.7)	164 (9.5)
	m指標形式	165 (37.8)	93 (38.8)	119 (41.0)	48 (41.4)	251 (55.2)	87 (44.4)	763 (44.0)
	その他	212 (48.6)	126 (52.5)	159 (54.8)	57 (49.1)	160 (35.2)	92 (46.9)	806 (46.5)

〔表7〕主要キャラクターの f/m指標形式使用状況

話し手〈アニメ〉	性	文数	f指標形式	m指標形式	その他
ドラミ〈ド〉	女	58	43(74.1)	0(0.0)	14(26.9)
ワカメ〈サ〉	女	53	36(67.9)	0(0.0)	17(32.1)
バタコ〈ア〉	女	76	49(64.5)	0(0.0)	27(35.5)
はづき〈魔〉	女	62	39(62.9)	0(0.0)	23(37.1)
サザエ〈サ〉	女	86	52(60.5)	0(0.0)	34(39.5)
ワッフル〈ア〉	女	50	29(58.0)	1(2.0)	20(40.0)
しんのすけ母〈ク〉	女	77	43(55.8)	7(9.1)	27(35.1)
まる子母〈ち〉	女	51	28(54.9)	3(6.1)	20(39.2)
たま〈ち〉	女	53	20(37.7)	7(13.2)	26(49.1)
どれみ〈魔〉	女	154	30(19.5)	43(27.9)	81(52.6)
しんのすけ〈ク〉	男	103	15(14.6)	27(26.2)	61(59.2)
まる子〈ち〉	女	209	30(14.4)	57(27.3)	122(58.4)
ドラえもん〈ド〉	男	122	16(13.1)	65(53.3)	41(33.6)
のび太〈ド〉	男	140	17(12.1)	65(46.4)	58(41.4)
りょうた〈魔〉	男	61	7(11.5)	27(44.3)	27(44.3)
アンパンマン〈ア〉	男	79	9(11.4)	26(32.9)	44(55.7)
マスオ〈サ〉	男	56	5(8.9)	24(42.9)	27(48.2)
バイキンマン〈ア〉	男	114	9(7.9)	53(46.5)	52(45.6)
カツオ〈サ〉	男	112	8(7.1)	45(40.2)	59(52.7)
トオル〈ク〉	男	60	3(5.0)	27(45.0)	30(50.0)
波平〈サ〉	男	89	1(1.1)	51(57.3)	37(41.6)
ジャイアン〈ド〉	男	72	0(0.0)	47(65.3)	25(34.7)

*数字は、文数(%)、f指標形式使用率の高い順に表示

〔表6〕は、f 指標形式、m指標形式の文が各アニメの女と男のキャラクターにどの程度用いられているかをみたものである。また、〔表7〕には50文以上のせりふのある主要キャラクターについての使用状況を示した。

〔表6〕で「全体」の項の割合をみると、〔f : m : その他〕の比率はおおよそ、女〔4.5 : 1 : 4.5〕、男〔1 : 4.5 : 4.5〕で、女と男のf 指標形式・m指標形式の文の使用率は対称的である。現実の話しことばの実態についての諸報告ではことばの性差はそれほど大きくないことが指摘されているが⁶、アニメでは女と男がかなり異なることばづかいをするものとして描かれていることがわかる。

また、各アニメについてはつぎのような特徴を指摘できる。

- ①〈ド〉は、女のf 指標形式使用がいちばん多く、m指標形式使用がいちばん少ない。また、男のm指標形式の使用がいちばん多い。〈ド〉は男の子とロボットを主人公とするアニメであるが、この6種のアニメのなかでは性差がきわだっている。登場する男の子たちは活発に動き回り、女の子たちはやさしく世話好きである。
- ②女の子を主人公とする〈ち〉〈魔〉は、他にくらべて女のf 指標形式使用が少なく、m指標形式の使用が多い。これはせりふの多いふたりの主人公が6種のアニメに登場する女の子たちのなかでもっとも「女ことば」的ではないことばづかいをするためである。このふたりはどちらも優等生タイプではなく、おっちょこちょいな性格として描かれている。
- ③〈ア〉では、他にくらべて男のf 指標形式使用が多めでm指標形式の使用が少なめである。また、女のf 指標形式使用は多く、m指標形式使用は少ない。すなわち、男のことばづかいは他より「男ことば」的ではなく、女のことばづかいは「女ことば」的である。〈ア〉は幼児向けのアニメで、登場するパンや動物のキャラクターの多くは幼く、無邪気でかわいらしく描かれている。
- ④〈ク〉でも女のf 指標形式使用は多く、m指標形式使用は少ない。男のm指標形式の使用が少なめなのは、せりふの多い主人公しんのすけのm指標形式使用が少ないためである。〈ク〉は幼稚園児しんのすけの「オラ～ダゾ」

というせりふが有名で、しんのすけはいかに「男ことば」的なことばづかいをしていそうに思われるが、実際は男の主要登場人物中もつともf指標形式の使用が多く、m指標形式の使用が少ない。幼似的なことばづかいとそれに似合わない低い声や女性に対するセクシャルハラスメント的行動という落差が主人公のキャラクター設定の特徴となっている。

- ⑤〈サ〉は、他にくらべて男のf指標形式使用が少なく、「その他」が多い。ここに「その他」が多くあらわれたのは、家族以外のおとなとの丁寧体での会話が深い(なお、これは〈ク〉の男のばあいも同様である)ことと、サザエの夫マスオがサザエの父波平に丁寧体で話すためである。女のm指標形式はすべて、3人の女の登場人物のうちのひとり、サザエの母フネがこどもに対して使用したものである。他のふたり、サザエとワカメではm指標形式の文は使用されていない。〈サ〉では父権的な波平を長とした性別役割分業規範に忠実な大家族が描かれているが、ことばづかいにもそれがあらわれている。たとえば、波平のことばづかいは非常に「男ことば」的で、6種のアニメの主要キャラクター中、2番目にm指標形式の使用度が高い。波平の話しぶりが横柄である一方で、フネは夫の波平に対しては常に敬語で話す。また、波平の「わし」「じゃ」の使用やフネの「かね」の使用など高齢者のステレオタイプの語法もあらわれる。すなわち、〈サ〉のことばづかいには性と世代のステレオタイプの特徴が目立つ。

3.2 キャラクターの性格・役割による差

おとなのことばづかいは、個人の性格ではなく家庭での役割、世代、階層などによってパタン化されて描かれているものが多い。性差という点でとくに注目すべきは母親と父親のことばであろう。母親と父親はアニメに登場するおとなたちのなかでも存在感が大きい。家族を舞台としたアニメ〈サ〉〈ち〉〈ク〉〈ド〉についていえば、〈サ〉と〈ち〉は三世代同居家族、〈ク〉と〈ド〉は夫婦とこどもの核家族であるが、いずれの作品でも母親は家事と育児だけをおこなう専業主婦、父親は会社員で日常的な家庭責任をおわないという固定的な性別役割分業型である。〈サ〉のサザエの両親フネと波平のことばづか

いには、すでにみたとおり、夫婦の上下関係が明らかにあらわれている。〈サ〉のサザエ夫婦、〈ち〉〈く〉〈ド〉の主人公の両親夫婦の関係はフネ・波平夫婦より対等にみえるが、やはりどの夫婦もことばづかいの性差が大きい（女：計229文、f指標形式135文・59.0%、m指標形式9文・3.9%。男：計142文、f指標形式6文・4.2%、m指標形式78文・54.9%）。家庭での性別役割分業がことばづかいの性差によって示されているといえる。

こどもの性差形式の使用は、キャラクターの性格によって変化がつけられているものがある。女の子を主人公とするものは、女の子のことばづかいが描き分けられているのに対して男の子のことばづかいは一様であり、男の子を主人公とするものはその逆であるという傾向がみられる。

〈ち〉〈魔〉の主人公の女の子は両方とも優等生タイプではなく、ことばづかいも6種のアニメの登場人物のなかではもっとも「女ことば」的ではない。これは主な視聴者である女の子に主人公をより身近に感じさせる方略だろう。いいかえれば、「女ことば」的なことばづかいは現実感が薄いということである。ただし、どちらも主人公の友人には「女ことば」的なことばづかいの優等生タイプの女の子が配されている。

ここで、〈魔〉の3人の主要登場人物（どれみ・はづき・あいこ）をみるとつぎのような差がある。

- ・どれみ(154文)：f指標形式30文(19.5%)、m指標形式43文(27.9%)で、ワ、カシラ、「体言＋ヨ」は不使用。
- ・はづき(62文)：f指標形式39文(62.9%)、m指標形式0文で、ワ、カシラ、「体言＋ヨ」を使用し、きわめて「女ことば」的。
- ・あいこ(76文)：一貫して大阪弁⁷。

せりふが「女ことば」的でない主人公のどれみは活発でドジでお人よし、一方、典型的な「女ことば」使用のはづきはお嬢さま育ちの優等生でやさしくおとなしいという設定である。また、大阪弁のあいこは、しっかり者でドライな行動派として描かれている。ただし、どれみのことばづかいが「女ことば」的ではないといっても、男の子たちのことばづかいとは明確に異なる。せりふの多い3人の男の子の文末形式をみると、計142文でf指標形式12文

(8.5%)、m指標形式65文(45.8%)であり、また、どれみの使わない「サ、ゼ、ゾ、ナ、ヤ、禁止ナ、カヨ、命令形(＋ヨ)、ダロ(ウ)、ジャン」などの形式が用いられている。また、「しょうがねえ」「うるせえ」といった融合形もあらわれる。なお、どれみに「女ことば」的なことばづかい(「～なのね」など)があらわれるのが恋をしている場面であることには注目していいだろう。

男の子のことばづかいのちがいは、たとえば、〈ド〉の主要登場人物のび太とジャイアンに典型的にみられる。ふたりを比較すると、つぎのような差がある。

- ・のび太(140文)：f指標形式17文(12.1%)、m指標形式65文(46.4%)
- ・ジャイアン(72文)：f指標形式0文、m指標形式47文(65.3%)
- ・ジャイアンは疑問表現に「～かよ?」を使うが、のび太は使わない。
- ・ジャイアンは「うるせー」「いけねー」「～じゃんか」などの融合形を使うが、のび太は使わない。
- ・自称詞は、のび太は「ぼく」、ジャイアンは「おれ」やときに「おれさま」を使用する。

のび太のm指標形式の使用は他のアニメのキャラクターと比較すれば決して少なくはないのだが、〈ド〉の男のなかではもっとも少なく、対するジャイアンのせりふは6種のアニメの主要キャラクター中もっともm指標形式の使用率が高く、非常に「男ことば」的である。また、のび太の声は高めなのに対しジャイアンの声は野太い。こういったちがいによって「気の弱いのび太」と「乱暴者のジャイアン」のイメージが描きだされているのである。ちなみに、主人公ドラえもんのことばづかいのはのび太に近いが、m指標形式を使用する文が多い(53.3%)。

性差形式の使用の多寡が性格設定と結びついているのは、他にも〈ア〉のアンパンマンとバイキンマン、〈ク〉の主人公しんのすけとその友だちトオルにみられる。「やさしい正義の味方のアンパンマン」は「ぼく」と自称しm指標形式の使用が少なく、「いたずら好きで乱暴者のバイキンマン」の自称は「おれさま」でm指標形式の使用が多い。また、〈ク〉ではしんのすけのせりふが「男ことば」的でないと対照的に友だちのトオルのせりふは「男ことば」

的である。おとなびた優等生タイプとして描かれ、行動も常識的なトオルはおとなの男の登場人物と同様のことばづかいをする。一方、しんのすけは憎まれ口をたたいたり、女性を性的にからかったりと非常識な言動をおこなうが、これは幼い者の無邪気さゆえだという解釈が、おとなの男とはへだたりのあることばづかいをさせることによって示されているといえる。

〈ア〉〈ク〉〈ド〉に登場するのは、かいがいしく人の世話をやくやさしい女の子や男の子のあこがれの的のかわいい女の子である。たとえば、〈ア〉のバタコや〈ド〉のドラミは前者の典型である。また、〈ク〉にはネネ、〈ド〉にはしずかという主人公の友だちがいるが、これは後者のタイプである。この女の子たちのことばづかいはきわめて「女ことば」的で、今回のデータではm指標形式がまったく出現せず、f指標形式がきわめて多く用いられている⁸。

4 「女ことば／男ことば」規範のすりこみ

テレビアニメでは、登場するキャラクターの性格や適用される社会的カテゴリーは、外見(顔、髪型、体型、服装など)や行動(感情のあらわしかた、しぐさも含めて)のステレオタイプのな描かれかたに加えて、ことばづかいのありかたによってはっきりとパタン化されて提示されている。金水(2003)は、特定の人物像と結びついた特定のことばづかいを「役割語」と名づけ、こども向けメディアには役割語満載だとする。その指摘どおり、今回とりあげたアニメでも、「老人語」「大阪弁」「お嬢さまことば」「ザマスことば」など特徴的な役割語が登場し、また、キャラクターの性別が性別カテゴリーを表示する役割語(金水(2003)では「女性語」「男性語」)の使用によって明示されている。

役割語のなかには偏見や差別と結びついているものがあると金水(2003)は述べるが、もうひとつ、なにが正しい日本語か、女あるいは男はどのように話すべきかといった規範意識を形成する側面が役割語にはあることを見のがすわけにはいかない。標準語とそれに近い東京語を正しい日本語とし、他の方言を亜流化、周辺化する評価基準は役割語の受容をとおして獲得されていくといえよう。そして、「女ことば／男ことば」規範に関する知識も役割語に

よって与えられるのである。

こどもたちがテレビアニメをとおして得るであろう「女ことば／男ことば」規範に関する知識は、これまでみてきたところからまとめると以下のようなものだといえる。

①ことばづかいによって性別カテゴリーを表示することは当然のことである。

動物など外見からは性別が不明のキャラクターもことばを発するとその性別がわかるしくみになっていることから、それを知ることができる。

②女と男では言語使用のルールが異なる。同じ表現意図をあらわすのに、女用と男用の別の形式(f指標形式／m指標形式)が用意されている。

③やさしい、おとなしい、かわいい、あるいは、上品な女ほど男とは異なったことばづかいをする。どのアニメでも、やさしい女の子やかわいい女の子、もっぱら家族の世話をする母親のことばづかいは、f指標形式の使用が多く、m指標形式の使用が少ない。逆に、活発で積極的な女ほど男との差が小さい。すなわち、男と対蹠的なことばづかいは従順さ、他者への配慮と結びついている。

④力強い、積極的な、支配的な、乱暴な、あるいは一人前の男ほど女とは異なったことばづかいをする。スポーツの得意な男の子や乱暴者の男の子、一家のあるじとして描かれる父親のことばづかいは、m指標形式の使用が多く、f指標形式の使用が少ない。逆に、ひ弱い男、おだやかな男ほど女との差が小さい。また、幼い男の子も女との差が小さい。すなわち、女と対蹠的なことばづかいは支配、力の行使と結びついている。

⑤したがって、ことばづかいの評価は女と男それぞれ別の基準によってしなければならない。

このような知識はまさにジェンダーに関する知識にほかならない。こどもたちは「役割語」から、ふたつの性別カテゴリーが非対称的に意味づけられ差異化されること(＝ジェンダー)、性別カテゴリーの表示はなされて当然であることを学ぶのである。

5 おわりに

本稿では、アニメのせりふをデータに、アニメが「女ことば／男ことば」規範に関するメッセージ、すなわち、ことばづかいは性別によって二種類存在し、その評価基準は女と男では異なるというメッセージを視聴者である子どもたちに伝えていることをみてきた。もちろん、このメッセージは意図的に送られるものではなく、「隠れたメッセージ」として機能するものである。したがって、メッセージの内容はことさら自覚的に理解されるわけではなく、繰り返しこのメッセージに接することによっていわば身体感覚のように獲得されていくことになる。こうして、ことばづかいに性差が存在することをごく自然のこのように感じる心性が育つと思われる。

もちろん、子どもたちがテレビアニメなどのメディアから学ぶこの規範に関する知識には、言語形式そのものについてのものも含まれる。真田(2001)は「最近の子供たちの言語行動を観察していると、幼いうちは方言があまり使われず、共通語的であるし、育てる人もティーチャートーク的共通語コードで子供に接していることが多い」と指摘する。このようなこどものことばのありかたにはメディアが大きな影響を及ぼしているだろう。幼いこどものなかには、地域のことばよりも、テレビやビデオのアニメをはじめとする東京方言の話しことばをベースにしたメディアのことばにより濃密に接する者もいる。程度の差はあれ、いまでは東京以外の地域の多くの人々も、東京式のアクセントや性差形式を含む語法を身につけているのが現実である。ことばの性差がちちまってきたという指摘がなされることが多いが、東京方言以外の方言社会ではどうであろうか。東京方言の性差形式が、従来は性差の小さかった方言社会にも拡散している可能性があるのではないかと考えられる。「女ことば／男ことば」規範がなかなか力を失わない原因のひとつはこういったところにもありそうである。

アニメリスト

① 〈ア〉「それいけ!アンパンマン」やなせたかし原作

「クリームパンダとリトルジョーカー」「パタコさんとワッフルちゃん」: ビデオ『それ

いけ!アンパンマン2000』所収

② 〈ク〉「クレヨンしんちゃん」臼井儀人原作

「宝クジを当てるゾ」「おそうしきに行くゾ」「雪合戦で勝負だゾ」「風間くんをお見舞いするゾ」:『クレヨンしんちゃんTV版傑作選第2期シリーズ1』所収

③ 〈サ〉「サザエさん」長谷川町子原作

作品No5014「ワカメ十年日記」作品No5016「おとうさんの一言」:2001.8.12関西TV放映

④ 〈ち〉「ちびまる子ちゃん」さくらももこ原作

「まるちゃんきょうだいげんかをする」「まるちゃんたち犬をひろう」:ビデオ『さくらももこ自選傑作集ちびまる子ちゃん1』所収

⑤ 〈ド〉「ドラえもん」藤子・F・不二雄原作

「のび太の「夢の金メダル」」:ビデオ『テレビ版ドラえもんスペシャル特大号 春の巻1』所収

⑥ 〈魔〉「おジャ魔女どれみ」東堂いづみ原作

「りょうたと真夜中のかいじゅう」「どれみの彼は中学生」:ビデオ『おジャ魔女どれみVOL.8』所収

注

- 1 内閣府男女共同参画局のホームページに、女性差別撤廃条約の実施に関する日本政府の第4・第5報告に対する国連女性差別撤廃委員会の「最終コメント」が掲載されている。
- 2 たとえば、伊藤他(1996)の意識調査では、77%の人が「男性と女性とは本質的に違う(「そう思う」「どちらかといえばそう思う」)」と答えている。
- 3 佐竹(1998)は、大学生の意識調査から、若い世代においても「女ことば/男ことば」規範がかなり強く意識されていることを指摘している。
- 4 たとえば、益岡・田窪(1992)の「ことばの男女差」の章にあげられている「女性的表現」「男性的表現」の事例など。
- 5 体言+ネ、ノネ、体言+ヨ、ノヨを用いる文が含まれる。
- 6 たとえば、自然談話資料にもとづいて職場の話しことばの分析をおこなっている尾崎(1997)、遠藤(2002)参照。

7 あいこの大阪弁のせりふは〔表6〕では「その他」の項にいられている。また、あいこは〔表7〕にはいられていない。

8 ネネとしずかの文末形式は、計64文でf指標形式41文(64.1%)、m指標形式0文である。

参考文献

- 遠藤織枝(2002)「男性のことばの文末」『男性のことば・職場編』現代日本語研究会編
- 尾崎喜光(1997)「女性専用の文末形式のいま」『女性のことば・職場編』現代日本語研究会編
- 金水敏(2003)『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店
- 佐竹久仁子(1998)「女ことば／男ことば」規範をめぐる『ことば』19号 現代日本語研究会
- 真田信治(2001)『方言は絶滅するのか 自分のことばを失った日本人』PHP新書
- 伊藤裕子・江原由美子・川浦康至(1996)『性差意識の形成環境に関する研究—性差に関連する文化の形成および教育効果に関わって』東京女性財団
- 益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版

(さたけ くにこ)